酒落本

山崎麓

PL
726
.35
Y34

Yamazaki, Roku
Sharebon

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

岩波講座　日本文學

洒落本

山崎麓

岩波書店

洒落本

山崎麓

PL 726 .35 Y34

目次

一　洒落本の起原……三
二　洒落本の定義と內容の展開……五
外形―名稱―展開の三方面
三　洒落本の分類……一〇
(1)本格的洒落本……一一
(2)準本格的洒落本……一四
（イ）繁昌記……一四
（ロ）案內記……一五
（ハ）傾城買指南……一八
（ニ）比較論……二二
（ホ）大通論……二四
（ヘ）擬似文學……二八
（ト）繪畫的……三〇
(3)特殊的洒落本……三二
四　洒落本の文學的地位……三四

LIBRARY
SEP 29 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

一　洒落本の起原

我が國に於て遊行女婦、あそび、あそびめ、遊女(うかれめ)、白拍子、遊君と名稱に變遷があり、性質に多少の相違はあるが、一種の職業婦人が居た事は誰も知る所である、而して國文學の到る處に點綴され、美しい情趣を醸して居る事もよく知られて居る、萬葉集を始め多くの歌集、源氏物語、大和物語を始め多くの物語、平家義經記曾我などの軍記物語、宇治拾遺古今著聞集などの說話文學等、皆此種の艶なる女性が散見して華やかな場面を展開して居る、就中、太宰府の白拍子たりし檜垣の嫗、宇多帝に召された江口の遊女白、淸盛を中心にした祇王佛御前、大磯の虎、龜鶴少將、磯禪師の女靜など最異彩ある婦人達であらう。

しかし之等は一篇の作品の小部分の彩色(いろどり)、挿話として入れられたもので、一篇が之等の女性を中心として描寫されたものは、室町時代以前にないのである、彼等を中心とし彼等の生活を主題とした作品は、實に德川時代に入つてからだ。

之は主として德川幕府の公娼保護政策に依るのであつた。卽幕府は寛永十八年京都に散在する私娼を集めて九條朱雀通に移し、一團とした、島原遊郭是である。同じく大坂に於ても天正慶長時代から散在せるものを、寛永年間に新町に集め公許した。江戸に於ても慶長年から存在した私娼を集め、元和三年舊吉原の一郭に公娼として許可し、同四年十一月より開業された。之は幕府が戰亂を經た人心を安定せしむるためと、私娼の取締に便宜なためと、遊里に入り込み勝ちな犯罪者捕縛に利用するためとの政策だつた。

此公娼保護政策と、遊郭內に於ける階級差別を無視せる慣習と、一面に於ける幕府初期の町人保護政策と町人の經濟的勃興と相俟つて、遊郭の隆盛を來し、同時に遊女と遊里を對象とする文藝の發生したのは怪むに足りない事だつた。

卽京都では島原を中心とする「たきつけ」「もえじゐ」「けしずみ」(延寶五年)「朱雀遠目鏡」(延寶九年)、新町を中心とする「浪花鉦(なにはどら)」(延寶八年)「古今若女郎衆序」(延寶九年)、吉原を中心とする「吾嬬物語(あづま)」(寛永十九年)「吉原鑑」(萬治三年)等である、しかし之等の多くは遊女の評判記、傾城買指南に屬するもので、遊里文學、花街文學としては原始的な性質を帶びてる事は當然だつた。

一世の奇才、井原西鶴が出るに至り、所謂好色本に於て、遊女遊里を對象とせる眞の文藝が現れた、從來の國文學に見るを得ざる遊女の活ける生活が描寫された、之に刺戟せられて、西澤與志の諸作、八文字屋江島屋一派の三味線本が續出した、しかし之等には西鶴ほどの感激と靈筆とが存しない、職業化し形式化した惰性的に發表せらるゝ如き有樣であつた。

以上が洒落本發生前に於ける遊里文學の狀態である、都會人は遊里文學を要求しつゝも、在來の無感激な作品を慊らず感じたらしい、寶曆に至つて純遊里文學と思はるゝ斯種の作品は、單に「禁短氣」二三編(明和二年)に過ぎないのを見ても這般の消息がわからう、夫も初編たる「傾城禁短氣」(正德元年)の好評を利用した作品に過ぎない、他は皆氣質本を中心とした世相の描寫に轉じたのである。

夫は政治的中心が江戶に遷ると遙に遲れて、文學的中心が此時代に漸く江戶に遷り始めた、その機運を促した一つの理由として、京坂作家が安逸を貪つて、何等の淸新さをも文壇に齎さなかつた事があげられはしまいか。

享保十三年、「兩巴巵言」が小本で發表された、作者撃鉦先生は何人ともわからない、全篇漢文で書いた吉原繁昌記で、遊女の名を分類して列記してある點は吉原細見とも云へる、その漢文も固くない狂漢文で、明治の初年、發表された雜誌の漢文を忍ばせるものがある、全體の感じが漢學者又は漢學生、餘暇を偷んで遊戯的に綴つた書と云ふ有樣である。該書は決して洒落本と云ふ範圍に入れ得ない書であるに拘らず、洒落本隨一の評判記たる「戲作評判花折紙」（享和二年）に頭取之部にあげてある。卽江戸人は之を以て洒落本の先驅と認めたのであつた。

本書に刺戟せられたのか、機運が然らしめたのか、恐らく兩者に依つてであらう、漢文脈の勝つた花柳文學が夫以後續出したのである。「史林殘花」（享保十五年）「瓢金窟」（延享四年）「百花評林」（同年）「魂膽惣勘定」（寶曆四年）「異素六帖」（寶曆七年）「聖遊郭」（寶曆七年）等を主なものとしてあげる事が出來る、而して之等を通讀する時、漢文が漸次和文に移り、地の文が對話體になりつゝある徑路を看取し得るのである。しかも構想は可なり原始的な遊里案內に近い、卽三味線本まで展開し來つた俳文脈の遊里描寫が玆に打切られ、更に假名草紙時代の粗朴さに還り、「吉原鑑」「浪花鉦」に表現された對話體に歸つたのである。換言すれば遊里文學は職業的作家の手から素人作家の手に、倦きられた描寫法から、新鮮な刺戟的な手法に、建設し直されたのだ。玆に始めて洒落本が文壇に一地步を占むるに至つた。其一半は大坂を、其一半は江戸を背景として居る、卽東西揆を一にして新遊里文學の發生が待たれ、歡迎された事がわかるのであつた。

二　洒落本の定義と內容の展開

洒落本は外形內容共に一定の典型が存する、外形は半紙四つ折（通常縱五寸二三分、橫三寸七八分）の大さ、紙數三十丁から六十丁內外迄、表紙は淡黃の唐紙まがひのものである、之に依つて形狀が江戸當時の蒟蒻に似て居ると云ふので蒟蒻本とも稱する。勿論表紙も一定しては居ない、深藍色、淡藍色、綠色、薄茶に薄淺黃の格子縞、麻の葉模樣、色摺の貼紙あるもの等種々ある。大きさも一定して居ない、美濃紙四つ折、所謂中本の形のものもあるし、上方板に至つては半紙本の大きさのも存する。しかし概括的に見て上述の外形の本が一番多いから、之を典型と見做す可きであらう。

內容は卽遊里を對象として、遊女遊客を描寫した文學が盛られて居る。勿論之にも例外が多々あつて、遊里の埒外に逸出して居るのも尠くない。（洒落本の分類參照）

しかし最大多數は遊里文學を內容にして居る、卽かゝる外觀の書に、かゝる內容を盛つてある書を洒落本と云ふのである、典型的洒落本の定義は正に斯くの如きものである。

洒落本の名稱は、他方面は知らず、洒落本では、「傾城買指南所」（安永七年）（一名十八大通百手枕）の序に

　近來出來る似山の洒落本のたぐひじやござらぬ。

が嚆矢らしい。次に「二日醉巵觶」（天明四年）序に、

　見かけは晒落本、世界は狂言、鳴聲鸚鵡石に似たりける

とあり、次に「田舍芝居」（天明七年）序に出て居る、

　洒落本の洒落を見て洒落る洒落は、洒落にもならねば、只おかしきを專とすべし

がある。同時にその名稱に含まるゝ意義も了解出來よう、滑稽を主とした本の心持であらう、「面美知之娌（もみちのり）」（天明九

年）の序文に滑稽(しやれ)と用ゐてあるのも參考に値しようと思ふ。但し「里のをだ巻評」（安永三年）にある「竹子の調味、升屋（洲崎なる料理屋の名）が洒落」「後編風俗通」（安永四年）に出て居る「諷(うたひ)は俳諧の源氏、戯場(しばゐ)は洒落の源氏にして」「當世左様候」（安永五年）序にある「通者(すひ)あれば當世(しやれ)あり、通者と當世とは唯是毫髪の間なり」とある洒落は單純な滑稽の義でなく、現今でも用ゐられてる洒落れた着物を着て居るなどの洒落の義が含有されて居ると思はれるし、洒落本の義も單なる滑稽だけの意ではなく、やゝ複雜な心持が含有されて居るであらう。それも現代語の洒落に含まれてる豪奢、派手、虚飾と云ふやうな惡い側の意義ではなく、洒落れた家などと用ゐられる、現代式洗練された趣味と云ふやうな意義にである。

洒落本の内容は三度の展開を示してる、此事は一度發表したから（雜誌「國語と國文學」大正十四年一月號參照）、茲には簡略に説明しつゝ、未だ盡さなかつた點を增補して行かう。勿論此三展開は政治的歴史の如く、劃然と時代を區切る事は出來ない、流動的變遷推移の三特徴だけを捕捉し得るに留るのだ。

第一期は漢學者或は漢學生等、當時の智識階級が、寸暇を偸んで遊里の描寫を試みた、遊戯的な洒落である、之が當時非常に歡迎され、之に倣ふ作家が續々現れた。其作家の傳記の明瞭な人々を見れば、一面には狂歌師であり、黄表紙作者であり、噺本の作家でもある、滑稽文學に興味ある人々で、併せて花柳界の通人を以て自負する人達である。純眞な戀愛などを吐露するのは野暮(やぼ)と考へてる都會人である。であるからその作品は、洒落、諧謔、ナンセンス等、巧妙な話術に興味の中心があり、表面だけは性慾などにも淡白らしく見せ、之に反する者は、半可通、新五左（或は淺黄裏、田舎侍の罵倒語）として嘲笑の的となし、眞劍な戀愛を描くには、修行の足らぬ若息子若旦那等を多くの場合に對象とし、所謂通者は相手の遊女が眞劍になつても茶かして居ると云ふ態度に描いてある。

卽洒落滑稽に託して彼等の陶醉する遊里情調を描かんとし、作者自身飽くまでも大通を以て任じて居た。此態度が天明の中頃まで續いた。

第二期は、山東京傳の作品發表によつて始つて居る、口には冗談を云ひ洒落を飛ばして居るが、作者の洒落本に關する創作態度は、眞劍眞率である事が認められる、彼は遊里を徹底的に觀察し盡し描寫し了らんと努力した。されば彼の筆にのぼる遊女、遊客の嬌態風俗盡く微に入り細に涉つて居る。卽彼の創作態度は最進步せる寫實主義で、其觀察は暴露的自然主義に似た所があつた、勿論洒落滑稽を無視するのではないが、之は從であつた。

彼の態度は文士にして大通を氣取る初期の洒落本作者に衝動と不滿足を與へた。彼の先輩で彼を裨助した森羅亭萬象、自作の「二日醉巵觶」(天明四年)で京傳に挿繪を畫かせ、文中に於ても

「今日は京傳と勘彌を見物にいつたが、どれもよくするよ、

「アレハ京傳が作の小紋裁の中の形だ、

などと盛に京傳を引立てて居た萬象が、突如「田舍芝居」(天明七年)に於て、

凡稗官を編に、ツの書法あり、能く近く譬をとらば、立役眞劍を拔いて實に敵役の頭を刎、やつし女形をとらへ前をまくりはたえをあらはにしてゑたらぬ事を仕出し、道外褌をはづし睾丸を振り廻さば目を驚かし片腹を抱ゆべけれど、正の物を正で御目に懸ずして、しかも正の物の如く見するを上手の藝と云つべし。戲作も亦然り、實を以て實を記すは實錄なり、虛を以て實の如く書成は戲作なり。

と京傳の寫實主義を攻擊したのは、新進京傳の盛名を嫉視した感情も混じては居るだらうが、一面に於て大通を以て任ずる萬象が、「缺點を知つて缺點を云はず」と云ふ大通の常道を、金科玉條の如く心得、之を創作に迄延長せしめた

彼の主觀であつたらう、其くせ京傳の作も寫生許りでなく、虚實を巧に點綴せしめあるのであつたが、そこまでは考へられなかつたらしい。

此に雷同して京傳の態度を攻撃したのは、狂歌師内新好であつて、其著「一目土堤」（天明八年）で次の如く云つて居る。

　夫に近年の略語本（しやれ）を閲するに女郎の穴を書ばよひかと思つて、おゐらんの内しやうのやりくり、かさねたんすの引出しの、隅からすみまであらひざらひ、櫻木に彫るゝ傾城の身にとつては、刎刀針（こがたな）の呵責よりもくるしふあらん。云々

之も大通の常道を以て京傳の創作態度を批難せんとしたもので、要するに從來の洒落本に略出來かゝつて居た典型、概念を京傳に依つて破られた其憤慨の表現なのである、以て奈何に京傳の作品が當時衝動を與へたかゞ推測される。

第三期は戀愛描寫と戀愛に依る事件の展開とに創作の中心が存した、眞劍な遊里の戀愛を描く事に作者の努力が拂はれた、夫は田螺金魚の「妓者呼子鳥」（安永六年）「契情買虎之卷」（安永七年）に起り、「傾城買二筋道」（寛政十年）に至り最頂點に達した。以後の洒落本は之に類似した書が多い。客と遊女との濃厚な戀愛場合（ラブシーン）を主とし、夫に伴ふ手練手管を書くと云ふ有樣であつた。

從來の洒落本が尠くも五六種の遊客を平等に描いて、云はゞ遊里の鳥瞰圖的描寫であつたのが、主人公、女主人公を中心とした立體的描寫に轉じた、即主人公女主人公の過去の經歴、戀愛の展開を描かんとする傾向になつて來た、單なる場面の描寫が、時間の繼續した事件の説明になつた、隨つて洒落本の續編が盛に刊行さるゝに至つた。

斯くして人情本に轉じたのである。人情本は勿論洒落本のみの系統を引けるものではない、複雜な事件を取扱ふ點には、著しく合卷本の影響を受けて居るが、其骨子は固より洒落本にある事は、人情本代表作家たる爲永春水が、絕

えず京傳の洒落本を對象として辯解して居る事實に依り知り得るであらう。(「日本文學聯講」近世下、拙稿「人情本の世界」參照)

三　洒落本の分類

洒落本は其發生の狀況から云つても各人各樣の構想意匠を凝らし、意表に出づる斬新さを誇らんとした、其點は黃表紙に似て居る、であるから分類法に依つては一作一種類と云ふ如き有樣になるかも知れない。

例へば吉原を對象とする作品が現るれば、品川に轉じ深川に轉じ新宿に轉じ、更に山下の岡場所、谷中のいろは茶屋、音羽、本鄕大根畑に飛ぶと云ふ有樣である、かゝる背景の斬新さに最苦心した痕の見えるのは、山手馬鹿人(大田蜀山)である。之に反し主として深川のみを題材としながら、或は吉原との優劣論、或は深川での催し物、或は流行を取り入れるなどして、同じ背景で異なつた構想取材に苦心したのは蓬萊山人歸橋である。一面には濃厚な戀愛場面と戀物語の描寫をするかと思へば、一面には洒脫な戲文めいた作品を發表する田螺金魚がある。こんな有樣であるから分類法に依つては徒に煩瑣を來すのみであらう。

しかし洒落本を通觀すると、其處に一種の典型が生じ、自ら同種類が多く集團する有樣が見える、茲には背景の差異に依らず、題材の取扱ひ方に依つて概括的に分類して見た。之が洒落本の鑑賞法に對し最妥當であると考へられるからである。但し同一作品で或部分は甲種に、或部分は乙種に、或部分は丙種に入ると云ふのも尠くない、要するに概括的であり、洒落本の各方面を表示するのが、此分類の目的なのである。

(1)本格的洒落本

(2)準本格的洒落本（或は變格的）

イ　繁昌記

ロ　案內記

ハ　傾城買指南

ニ　比較論

ホ　大通論

ヘ　擬似文學

ト　繪畫的

(3)特殊的洒落本

之等を順次說明して行かう。

(1)　本格的洒落本

洒落本全體を通じて最多いのは、遊里を背景とし、遊女と遊客とを對話を主として描寫してある作品である、卽之を洒落本の典型とし、本格的と見做すのは最妥當と考へられるのである。之を背景に依り吉原物、深川物、品川物等に分類し得るが、既に分類された書があるから茲には省略する。此分類に屬する重なる作品をあげれば、「聖遊郭」（寶曆七年）、「郭中奇談」（明和六年）「遊子方言」（同年頃）「辰巳之園」（明和七年）「南閨雜話」（安永二年）「甲驛

新話」（安永四年）「契情買虎之巻」（安永七年）「美地之蠣殼」（安永八年）「深川新話」（同年）「通言總籬」（天明七年）「自惚鏡」（寛政元年）「繁千話」（寛政二年）「錦の裏」（寛政三年）「傾城買二筋道」（寛政十年）「辰巳婦言」（同上）「闇明月」（寛政十一年）「南門鼠」（寛政十二年）「商内神」（享和二年）「吉原談語」（同上）「籬の花」（文化十四年）等である。

本格的洒落本の內容を解剖して見るに、背景をなす遊里は奈何なる土地であつても、其遊客から見れば、次の種類に分類されるやうである。通人、初心な若者（若旦那、若息子）半可通（氣障な江戸侍と町人）野暮客（田舍侍、田舍者、店者、上方商人）江戸町人（職人）是である。遊客の型は略此中に納まるのである。

之等の客と遊女との交渉を描いてあり、兩者の間の眞劍な戀愛、遊戲的な戀愛、戀の手管掛引、冷遇、戀の意地等を寫しつゝ、遊里の情調を浮び出させんとしたものが本格的洒落本である。眞劍な戀をして居るのは、通人と初心な若者で、其相手は前者が年增の遊女、後者が未だ里慣れぬ若い遊女と云ふ型になつて居る。前者の例はあげる迄もなからう、後者の例は「南閨雜話」の品川灘屋琴浦と材木屋の若旦那幸次郎、「寸南破良意」の十六歳のふせ屋お初と若息子、「賣花新驛」の新宿桝屋近江野と鼠輿、「自惚鏡」の吉原松島と息子榮次郎等である。

初心な若者は謙遜溫順で氣障な所がない、其點で大通と一致して居るから遊女に愛せられる事になつて居る。之等の濃厚な戀愛場合に對照せしめて、半可通、野暮客等を點綴し、單調を破るやうに注意してある。野暮客中、田舍侍、田舍者は其お國訛を以て滑稽化し、露骨な性の要求でいやがられるし、店者上方商人等は金遣ひの細い點を誇張して滑稽化してある。江戸職人は多く淡白で、其一夜だけ面白笑止しく騷げればよいと云ふ態度の者に描いてある。之が概括的な本格的洒落本の構想である。遊女に就いては前に述べた事があるから茲には省略する。（「國語と國文學」大

正十四年四月號拙稿「洒落本に現はれたる遊女」參照）

而して其構想は遊里の橫斷面的描寫、遊里の鳥瞰圖である、長い時間の繼續よりむしろ、各部屋々々の種々相、一夜に起る光景を寫生的に描いたものである、遊女は奈何にしてかゝる身の上に落ちたか、誰人の子であるか、此通人は奈何なる身分か、此新五左は何藩のどの位の祿高の武士か、そんな事は問題になつて居ない。一場面一場面をスケッチして＝非常に穿ちを目的としたスケッチ＝全體に湧き出る遊里の情調、刹那的な遊蕩氣分、之を味へばよいと云ふのが作者の態度らしい。であるから吾々は洒落本を讀む時、かゝる情調の描出と、篇中の人物の活寫がどの位迫眞力を以て、成功して居るかを鑑賞すれば、よいのではないかと思ふ。

かゝる遊蕩の世界も亦人生の一橫斷面として、今猶存するのではないか、之をスケッチ的に描出するのも亦、文藝の一存在たり得ると信ずる、之を鑑賞し、自己の實生活に立脚して批判するのも、一つの鑑賞法であらうし、かゝる世界の人生に存するのを肯定し單に讀み興ずるのも一つの鑑賞法であらう。讀者の鑑賞法に依つては、かゝる描寫にも自己反省が伴ひ、人生に觸るゝ或物を捕捉し得ると考へる。戀愛は純眞ならざる可からずと云ふ前提の下に、洒落本の戀愛を虛僞として斥け、作品の價値にまで其論旨が延長されるのは、恰も萬葉集の作家の態度を推賞するの餘り、之と狂歌とを比較して、狂歌を貶するやうなものではなからうか。遊戲的戀愛も人生に現はるゝ儼然たる一現象である、之を描出して其效果が、成功して居れば、其文藝は成功して居ると認められよう。遊戲的戀愛を是非するのは、倫理の範圍であつて、文學の範疇でない事は言ふまでもない、唯其描寫奈何を論ず可きであらう。

洒落本の本質は、此本格的作品と次に說く傾城買指南及び大通論の洒落本などの內に含有されるやうに思はれる。

(2) 準本格的洒落本

本格的洒落本と同様遊里を對象としつゝも、對話に乏しく寫實的でない、或は戲文狂文であつたり、或は案内書めいたり、大通の講釋であつたり、嚴格な意味では小說であり得ない、之を準本格或は變格の洒落本とする。其形式も千差萬別である、しかし多數の內には自ら同種類、類似せるものが集る、之等の中から概括的に分類したのである。

(イ) 繁 昌 記

之に屬するものは言はゞ遊里の總論である、奈何に遊里が繁昌するかを述べ、その裡(うら)には無限の遊里禮讃、遊女禮讃の心持が含まれて居る、中には一轉して江戶の禮讃に及び、更に太平の聖代に逢へる喜びを敍したものもある、之は決して幕府當局に媚びたり謳歌したりするのではなく、江戶の逸民たるを誇る心持である、文化の粹たる江戶に生れ、江戶人として洗練されたる趣味を知り享樂し得る事を感謝し、同時に都會に同化し得ず、都會に關する常識に乏しい地方人に對する輕蔑である。要するに江戶自慢が其基調を成して居ると考へられる。

此やうな結構な御代とてはむかしより有がたき御江戶の繁榮千代に八千代をさゞれ石のいはほと成てこけな折助もめりやすの文句を知り、初在勤の新五左も聞へませぬ才三さんをかたる時々。(「櫻河微言」)

爰か東都の廣大なる難有ところなり(中略)忽此里繁榮し百年のむかしに遡り、貴賤群集袖をつらね、晝夜ふいとふ/\の聲絕へず、太夫格子も再出揚屋/\も軒をならべ、又あいがたき太平のよき遊ならんとホヽうやまつてまうす。(「郭中掃除」)

前者は江戶の繁昌を謳歌し、後者は更に吉原繁榮策を之に續いで居るのである。

此面白と目出度といふ事、扶桑廣しといへども、東都に止る(中略)恐るべきは東都の盛なる事、他邦の及ぶ所に非ず、長袖

能辨多錢能商の大都、浪華の肩をならべんとは虫のよきの甚きなり。（「奮軼本紀」）

に至つては露骨な江戸自慢の表現である。此分類に屬する重なる作品は、「當世氣轉草」（安永二年）「當世姿かしこ」（安永四年）「櫻河微言」（安永六年）「中洲雀」（安永六年）「百安楚飛」（安永八年）「當世繁榮通寶」（天明元年）等である。「大抵御覽」（安永八年）の如きは一半は中洲の繁昌記であるが、一半は次の案内記に屬する、かゝる種の洒落本も存するのは當然であらう。

（ロ）案 内 記

洒落本の繁昌記的作品の、更に具體化したものが、此案內記的洒落本である、遊里に關して不案內な讀者に、遊里の地理的教科書たらんとする心持で書かれたのが、斯種の作品である、地理的ばかりではない、遊女に關しても豫備智識を與へんとする作者の心持が現れて居る、卽吉原細見的の作品でもあるのだ。

何れにしても讀者を指導せんとする意識の多量に存する事は注意す可き現象である、之も作者が遊里通である事を誇らんとするのであつて、本格的洒落本の如き純寫實の描寫にすら、此意識が働いて居るのだ。（（ホ）大通論參照）地理的教科書と前に述べたが、其中には多大の滑稽が含まれ、眞面目た説明ではなく、地理書の捩り（Parody）、擬似地理書に綴つたものも存する、之にも漢學の地理書に擬したもの、或は蘭學より來た世界地理書に擬したもの、地理に關した和書とある。又遊女遊里の説明にも、遊女の個人的説明を主とせるもの、遊女の階級種類の説明を主とせるもの、其人品風俗の紹介を主とせるものと、數種に分類し得るのである、今之を表に示せば、次の如くである。

地理的 ┬ 漢書的
　　　 └ 蘭書的

- 案内記
  - 和書的
  - 細見的
    - 純細見的
    - 階級種類
    - 人品風俗

今各分類の例を示せば、

衣紋坂、國門之外、有衣紋坂、嫖客整襟、刷裳之地也（「史林殘花」）

大門灘、衣紋海より中之潮へ入る灘也、此灘を過ぎされば五州の人事あたはず、婦人は此所を通りがたし（「娟妃地理記」）

羅郭島之記、唐土に巫山あり、雲髻雪肌のすめる處ときく、吾朝より北の方、十萬里を行て、一里を隔て世界あり、其名を羅郭島といふ、蓋天女のすめる處。云々。（「廻覽奇談深淵情」）

右は漢學地理書の文脈をひける例である、但し最後の者は此分類に入る可き書でなく、本格的洒落本であるが、右の敍述文だけは好適の例であるから特にあげて見た。

ヤホツ國、此國、夜有て書なし至て毒潑有、とうへん木と云木を生ず、亦へちまといふ草多し、何れもたわけの根悉く蔓り、米粟不生、常にきらすといふ者を食す。（「華里通商考」）

茶人島、サビタガリ、此國の人物禮儀ただしくせんしやう高慢甚しき也、不才之人、此國に來りてにわかにものしりとなる（中略）此國より通路の外夷左に記す、ヨミタガリ、メキキタガル、ハナイケル、ボンセキ云々（「六丁一里」）

之は蘭學系統の地理書の模擬である、否必ずしも蘭學とは限るまいが、長崎輸入の外國語仕込の萬國地誌の洒落である、「華里通商考」即「華夷通商考」（元祿八年）のもぢりなる事を知れば、這般の消息は了解される。「大通愛想盡」（安永八年）の卷頭に、「唐土馬鹿羅州の王、阿里奈士王、隣國の阿喜蓮王と意氣地を爭ひ」とあるのも、列國の名稱

と郭言葉とを結び付けて洒落れたのである。川柳の所謂アリンス國で、前出の「娼妃地理記」(安永六年)にアキレン洲の名稱が出て居る。

偖之等は必ずしも漢書系統、蘭書系統と書に依つて分離して居るのではない、同一の書でも前半は漢、後半は蘭と云ふ如く、併載されて居るもある、前記の「六丁一里」の如き是である、唯便宜上分類したに過ぎない。

和書を擬似せしめた地理書では、「當世導通記」(天明二年)と「無彈砂子」(天明六年)とが、代表的の作品であらう。前者は當時の旅行案內たる道中記のもぢり、後者は江戸地誌として有名な菊岡沾涼編「江戸砂子」のもぢりである。前者が長い綺圖を入れ、馬賃駕籠賃に擬して遊女の値段付を入れれば、後者は、毛古路橋、しやれ町、地獄谷等の土地を眞面目な顏で說明して居る。兩書共にその原書が知られて居るだけ笑止味が讀者によくわかるのである。

次に吉原細見に類似するものをあげよう。純細見的のものは、遊女の名寄せである、細見と異なる所は、大に文學的な味が着けてある事だ、「郭中美人集」(安永八年)がその典型的の書で、花の姿色名寄と題して當時吉原全盛の遊女の名を集め、花の姿新色名寄と題して同じく新進の遊女を列擧してある、其敍法は古淨瑠璃の花そろへ、美人揃へなどに似通ふものである。其他「辭都洒美選」(天明三年)も之に屬する。皆遊女の名を中心としたものだ。

次に遊女の種類階級を說明せんとした書は、(細見では之が∧：∧・等の符號で簡略に示してある)「煙華漫筆」(寬政年間)が典型的のもので、京傳の「客衆肝照子」(天明五年)も此種の中に入れ得る。

次に各遊里を紹介し、或は妓樓をあげてあるものには、「瓢金窟」(延享四年)「婦美車紫鹿子」(安永三年)「契國策」(安永五年)等をあげる事が出來るし、之等數種を併せ記して居る書に「大抵御覽」(安永八年)をあげ得る、中洲の岡場所の遊女と妓樓との名を列記してあるのだ。

地理書を模した作品は、遊戯的氣分に滿ちて居るから、眞面目な案内記と見得ないが、其他の書に於ては、作者の徹底的な探究のもとに記されたもので、特に前記「婦美車紫鹿子」の如き吉原、品川深川新宿以下、江戸中の岡場所約七十餘ケ所をあげて其價格品位を批評紹介して居るのである、其苦心努力は敬服に値する、作者蓬萊山人歸橋は奈何にしてかゝる努力を惜まなかつたのであらうか、猥に今日より忖度し得ないが、想ふに彼の遊里に對する愛好心と趣味と、加ふるに通としての誇りを滿足せしめん爲であつたらう、而して夫が所謂大通、通人の一方面であつた事を知らねばならぬ、通人は感情的のみでなく、單なる消息通でもなければならなかつたのだ。

和蘭學系の地理書の模擬によつて、吾々はこんな事を知り得るのだ、卽江戸つ子は一面に於て新らしがり屋である、特に當時の文士は文化の尖端を行くモダンボーイである、聞き覺えの蘭語（中には風來山人及其門人森羅亭萬象の如き專門家も居るが）を振り廻して喜んだのである。王朝時代に支那人の口吻其まゝの漢詩が作られたと同じ心持である。根强い外國憧憬の國民性が、無意識の裡にかゝる遊戯文學となつて發露されたのである。

長崎を通じての外國憧憬なのだ。酒落本のみならず、黃表紙中にかゝる蘭語に模擬した滑稽が見える、山東京傳が横文字を綴り、式亭三馬が、南蠻語の毒藥を用ゐたり、唐音蘭音を比較したりして居る、夫等に關しては京傳作「百人一首和歌始衣抄」（天明七年刊）、三馬作「敵討宿六始」（文化五年）、「御覽親孝經」（享和二年）等を參照あり度い。皆此酒落本に現れて居るのと、同じ心持なのである。

（八）傾城買指南

色に狂ふ野暮客は勿論、戀には淡白らしく裝ふ通人と雖、遊里に興味をもつて通ふ以上、遊女に厚遇されるか、少くとも面白く、遊ぶ事を目的としない者はあるまい。遊里の情調を喜ぶと云ふ人も、遊里に居る婦人に不快な態度はし

て貰ひ度くない位の關心はもつ筈である。結局は遊女に愛されたいのだ。

奈何にして遊女に愛されようか、尠くとも嫌はれまいか、此問題を解決す可く生じたのが傾城買指南の洒落本である。

「魂膽惣勘定」（寶暦四年）に「女郎の好不好を知る傳受」とあるのも、遊女の好き嫌ひを知つて之に注意するやう、遊客の心得を說いたのである。「間似合早粹」（明和六年）に「粹のせざる事」の章があつて、「おしろい青黛、匂袋」と誡めたのも、遊女に氣障がられぬ心遣ひに外ならぬ。

唯美男醜男に差別なく、氣とり第一が女郎買の大の奧義也、おれは色男なりと心得、當世の洒落言葉などにて女郎にすいならんと思われんとする事、反て大きにふらるるの基なり、されば眞の女郎買はけつして洒落言葉などいわず、しつぽりと遊ぶ故に大もてにもてるなり。（「虚誕傳」）

金は寶の最上なれども色遊の座にては卑劣なり、金づくといへば戀は外になるとおもふべし。

女郎の身のうへに疵あるともしらぬ顔がよし、いかにも其座の興など覺る事も有なり。（「大通傳」）

色男をせくべからず、しかしせかぬも情のなきやうなれば、ぶ男かおやじか、けちなやらうをせいて見すべし。いろ男をせくと女郎の心あじになりて、ついに變化したがるもの也。（「契情買虎之卷」）

かゝる例をあげれば實に夥しい。（最後の「契情買虎之卷」は本格的洒落本で、其卷末にやぼに示す傳授事が附錄としてついて居るのだ）奈何にして遊女に愛せられようかと、非常に細心な用意で神經を惱して居る作者の態度は、一方で洒落や茶目を盡して居るだけ、眞劍さが認められるのだ。

奈何にして遊女に愛せられん乎と云ふ問題は、一方では奈何にして遊女の眞情を知らん乎と云ふ問題である、自分

を愛して居るやうに見せては居るが、だますのは遊女の習ひと云はるゝ郭の事である、相手がどんなに起請文を書いても、指を切つても疑へば疑へるのだ。何とかして相手の心底が見屆け度い、之が遊客の眞劍な要求だ、傾城買指南の書では此問題に解決を與へんとして居る。

扨女郎の模樣で、こつちから隨分惚れた調子になされい、その時傾城色々と氣味あふ咄などなさば口さきでは誰にも云ふもの、呼び度いがほんの事なら、其しるしが見たいなどここらのせりふに模樣ありたし、調子によつてあくる日を流して遊ぶ事もありたし、とかくいとゞ續けねば物事がすつかりわからぬ物だ。(「十八大通百手枕」)

傾城の心を見分けると申す事はめつたには參りませぬ、ハテ同じうちの朋輩遣手の目にさへ見えぬ色事を、なんぞたまさか參る客の目に見せてつまるものでござりましよふか。(「舌講油通汚」)

前者は通ひ續けねば遊女の內情はわからぬと云ひ、後者は平常共に生活する朋輩などにも遊女の色事はわからないのに、たまにしか行かぬ客にわからうかと道破して居るのだ。此問題を最詳細に解決せんと努めたのは、山東京傳である。「令子洞房」(天明五年)で、「女郎五つの見やう」あるを說き其態度で色客ある者、地色ある者、浮氣な者等を區別す可しと敎へ、「初會にもてたる樣子」で眞に相手が自己を愛して居るか否かの鑑定法を說き、更に「女郎の虛實を知る事」で具體的に例を示して居る。又「吉原楊枝」(天明八年)で「初めの晚に女郎のほんに惚れたと、かけるのとはぢきに知れる口傳あり」と言つて具體的に說明して居る、全く體驗家の權威的答案を示して居るのだ。

此種に屬するもので客に對する遊女の心得を說いた書がある、しかし眞意は客の要求を巧に穿つて描かんとしたのに外ならぬ。「陽臺三略」(明和年間)に客引呪咀祕法、指斬時の祕傳、以下遊女の心得が書いてあるが、遊女から見れば大した祕傳でもなささうだ、初心の客に對する心得艸と云ふ處らしい。こんな事も知つて居るぞと云ふ作者の通

人ぶる誇りである。之に屬する書には、「金枕遊女相談」（安永年間）「傾城異見之規矩」（天明元年）「深彌滿於路志」（天明二年）等が存する。

傾城買指南の書で異色あるは、「虚誕傳」（安永四年）と「根柄異軒之傳」（安永九年）とである、

今時の放子もてるを色男と思ひ金銀を費事、是わ眞の色男にあらず。眞色男と言者は、唯金銀をつかわずして女郎をじゆう自在にするを、眞の色男といふ者なり。（「虚誕傳」）

と云つて金を遣はずに遊女にもてる法を說き、「根柄異軒之傳」では色事金持指南所の引札を配つて兩方を指南する事になつて居る。特に前書で「貧に見せかけて行べし」と云ひ、「是より女郎を只買の段也」などと說いてある、勿論金で面を張るやうな態度で居る大盡客への反感であらうが、少し極端に走つて野卑さが見える、之に對する辯駁が、「辯蒙通人講釋」（安永九年）に依つて成された。卽同書では金を活して遣へと云ひ、遊女生活が奈何に金が要るものであるかを說明し、「其金をやらぬと申すは是人外でござります」と道破し、

ト申て金を遣ば野父と覺しめそふが、又そふでございませぬ、多くの女郎共みな客のふところあてでござります

と教へて居る。

以上のやうな諸相が、傾城買指南の洒落本に見えて居るが、要するに一種の教科書だ、だから冷靜的であり理智的である、惡く云へば打算的である、戀愛の情操教育ではなくつて戀の手練手管の掛引を教へて居るのだ。

但し流石に遊女をだませとは教へてない、深くだまさるゝなと說くのだ、

だますは商賣、だまさるゝは慰みなり、その商人をだまさんと心がける客もあれど、それは百足小判で、正じんの小つぶ切りに行くに等しかるべし（「吉原楊枝」）

と誡めてある。が飽くまで打算的な態度は失つて居たい。

　凡客の心得、女郎にほれたらば實をつくし、ほれずばはやくやめてほれた所へ行べし。いかほどほれたりとも女郎に實がなくばむだなり、其女郎ばかり女郎にもあらず、氣のすむ所へなじむべし（「令子洞房」）

相手次第の掛引を教へて居るのである、之は戀愛の前科者、戀愛の免疫者の言である、盲目的な戀や、純眞な戀は戀の初心者に多いのであつて、郭に入り浸つて居る人々には強ひる事が出來ない、譯(わけ)知りの伯父さんが、若者に戀の說教する態度が、之等洒落本作家に存したのだつた。

（二）比　較　論

遊里に精通して來ると、自分の趣味なり生活の環境からなり、自然に好む遊里が出來、彼を貶し之を揚げるやうにならう、其心持を發表したのが此分類に屬する洒落本である、比較論或は優劣論である。一方に奈何に遊里に精通して居るかを誇る心持から出た比較論である事は、看過してならぬ點であらう。

「跖婦人傳」（寶暦三年）は明に吉原の太夫と夜鷹との優劣論であるし、此系統をひける「太平樂卷物」（安永年間）は船饅頭と町藝者との比較論である。

蓬萊山人歸橋は深川が一番好きであつたらしく、深川を題材とした作品が一番多い、隨つて彼の著「龍虎問答」（安永八年）では、吉原深川の比較を論じ、深川をあげて居る。田螺金魚の「淫女(にせい)皮肉論」（安永七年）では深川以下の岡場所が、吉原遊女の高慢專橫を憤り、品川新宿を語らひ吉原と戰端を開くと云ふ筋であるが、互に其缺點を暴露する所は、明に比較論の形式をなして居る。

「突當(つきあて)富魂短」（天明元年）は富圖番號に擬して、吉原、品川、新宿、深川の遊女遊客の魂膽を描いたのであるが、

明に比較意識が働いてる事が認められる。山東京傳の「古契三娼」(天明七年)も、吉原深川品川の風俗習慣、名稱氣質の相違を語り合ふ筋で、優劣は勿論語つて居ないが比較意識は存在して居る。

烏亭焉馬の「客者評判記」(安永九年)と「通人の寐言」(天明二年)とは、共に此分類に入れ得る、前者は役者評判記に擬し、後者は合戰物語に擬した書であるが、共に吉原始め各岡場所の遊女及遊客の品評である。

稍異色あるは、「男倡新宗玄々經」(寶暦年か)で、傾城と野郎との露骨な優劣論で、結局は野郎の奬勵みたいになつて居る。此優劣論は古く浮世草子にも存し、「諸和氣姥櫻」(元祿五年)の如きは全篇此議論で終つて居る有樣であるし、風來山人の「無根草」(寶暦十三年)にも此論議が烈しく行はれてる。「玄々經」も之等と系統を等しうせるもので、男色流行の閃きを示した書と云ふ可きであらう。

前に述べた如く此分類に屬する書は、眞に優劣を論ずるよりは、種々の相違を比較する際に示す犀利な觀察に作者の誇りを見せて居るのである、結局は穿ちに興味をもつ仕事なのだ。

前述の「客者評判記」だけは、女形之部に各遊里の遊女に明瞭な品等を附し、大極上々吉に吉原、上々吉に深川、新宿、卷軸大上々吉に品川をあげてある。之は深川通に言はせると不滿のある所であらうが、兎に角等級をはつきりつけてある。其他の書に於ては明瞭にこんな等級を附したのは、見出せない。かう簡單に等差を附しにくいにも依るであらうし、又他日下位に品評した遊里からの抗議を慮つた通人の態度かも知れない。

馬通のいきはさ、吉原のうづたかさ、何れ其道に入つては面白からぬ所はなし、中にも深川は岡場所とは云ながら、吉原にも劣らぬ地なり。(「龍虎問答」)

と深川贔屓も婉曲に深川を禮讃して居る程度である。どうせ主觀的の趣味であり、優劣を決定するのは必ずしも作者

の目的ではない事がわからう。

傾城買指南を說く人は所謂大通である、尠くとも通人を以て任ずる人々だ、であるから傾城買指南の書と、大通論の書とは紙一重の差である、指南を說き併せて大通を說いた洒落本も尠くない。

しかし又單に大通を抽象的に說き、更に之を辯駁して居る書も存するから、之を分類するのも妥當であらうと信ずる。

（ホ）大　通　論

大通とは何であるか、「一目土堤」（天明八年）に「しかるに安永六丁酉のとしよりは、大通といふ事江府江中に專ら流布す」とあるは奈何な典據に依つたか不明であるが、安永六年に「大通傳」が發表され、又安永七年に田螺金魚作「十八大通百手枕」が發表されたので、安永六年と斷定したのではないかと私は推測するのである、實際當時淺草藏前の札差を中心とした所謂十八大通が橫行した時代だからであらう。しかし一面に於て、同じ金魚作の「淫女皮肉論」（安永七年）に、

大通とはなんの事だへ、通の利は五六年もあとの事さ、此頃はその十八人のうちにも、へや子になつていなさるもあり、又うら店にとちこもつて、門出もならぬ人もあるげな、わつちらァその通がきついきらひさ。

とある、之は作者が故意に惡口を云つたのであると認められる一節ではあるが、大通は決して劃然と安永六年から唱道されたものではない證據とはなるであらうが、文學上題材となつたのは安永六年以後なる事は確實で、しかも安永七年以後、黃表紙、洒落本、滑稽本に其名稱が盛に見えて居るから、此時代から社會的に認められたとするのは妥當であらう。

大通の定義は「蛇蛻青大通」（天明二年の刊行らしいが、風來六々部集にも出て居り、一世風來山人の作たる事は疑ひない、即安永八年以前の作）にあるのが明瞭だ。

夫れ大通といふ文字は唐の俗語にて、大いに人情に通じたるを稱したる字の通りの詞なり、近頃世上一般の通語となりて書三買ひの意氣人より、切店そゝりの俠客にいたるまで假にも通を唱へざるなし（中略）客といふ字の位を落さず、買といふ字を心に込め、惡穴を言はず惡洒落を決してせず、見えをいはず、嘘をつかず男氣を専らとして、座敷の數を重ぬる時は儒めずして通となり、態とならざる仕打の中に、おのづと出づる面白みには、傾城も思ひ付き世間でも有り難かるべし。

大通とは人情に通ずる人と云ふ定義は肯定し得る、しかし必ずしも遊里にのみ通ずる謂ひではなかつたであらう。

夫粋といふ辭は遊里にのみかぎるべからず、貴賤尊卑にかゝはらず、萬端の事や渉りて其所に臨み、それ／＼の粋をつかふ事なるを花街にのみ入込で、其徒ばかり一ツはいにするを粋じやとおとしつけたるもおかし。（「間似合早粋」）

とある、粋と大通と全然同じではないが、此論旨は大通にも云へるであらう。大通の名稱語源は唐書からと前にも出たが、「古今三通傳」（天明二年）には

莊子に大通の文字あり、世說に晉の時代のずぶ六ども任放を以て通とし達とすと見えたり。

とある、原書に當つて見ないが、恐らく此邊から出たものであらう。

大通の態度は前の「蛇蛻青大通」にも出たが、具體的に論じたのは「十八大通百手枕」で、先づ通人の服裝を述べ、心得置く可き諸藝を論じ、更に各遊里の消息を細敘してある、作者金魚の論旨に從へば、大通とは遊里のみならず諸般の事物に通じて居なければならぬのだ、しかし作者の態度が奈何にもひけらかすやうな氣障さに滿ちて居たから、直ぐ反感をもたれたらしく辯駁書が出た、夫は「無頼通說法」（安永八年）である。前書で一詩歌、連俳、琴棊、書畫、

しき島の道にもくらからぬが大通と承り及んでござる」と云へるに對し此書には、

（前略）次には亂舞、琴、三味線、河東、長うた、半太夫あらゆる藝にあがきくたびれ、あげくのはてには、人の知らない事を知て、それで高慢がしたくなつて、

と嘲り、前書に四宿岡場所の人氣女をならべてあるに對しては、

糸瓜にもならぬ作名をひろめ、江戸四里四方を近付と見せかけ、

と難じ、更に

吉原深川は申におよばず、すべて遊所の穴をさぐり、女郎の買ひやう客のいきさつ地色客色、かひむのこんたん、隅から隅まで知た自慢を古今ぶそうの大通だと、いつはし心で思ひましたが、今さら能よく考ますれば、これらは實の大通ではなくて、ほんに井の裡の蛙大通、高慢齋のしうちで御ざつた、

と自嘲的に述べて實は田螺金魚を冷評して居るのだつた。金魚が大通の服裝風俗を敎へれば、此書には、

大通と申は姿かたちを以ていわず、

と一喝し更に

さてまた大通の女郎買ひは、本田あたまに黑したて、こうした合着で、あにした下着と、一から十まで註文すぎたは、見へぼう庳ぼう、色取ぼう。

と痛棒を喰はせてある。然らば作者戀川春町の大通とは奈何なるものかと云ふに、

浮世の穴を知つたをいわず、諸藝を殘らず知たを言す、唯こころいきの通つた人を愚僧が宗旨の大通と言ひます。

とあるので了解出來よう、通を衒ふは勿論、通をひけらかしてはいけないのである。此書と同時に「大通愛想盡」「大

通法語」が出て居る、前者は當時の自稱通人の攻撃で、「十八大通百手枕」の反駁であるらしく、後者は概論的に通人の心得を說き、「我衆にふかくきらふことは、惡振（いやみ）、己惚、利口張（きいたふう）、趣向過（いきすぎ）の四つ也」と云つて、紳士道の中庸を教へて居る。

「辯蒙（いいわけ）通人講釋」（安永九年）には、

世上に申ます野夫（やぼ）、物知（する）、能人（いき）、大通と四色にわかちますれども、ぎやつと生れるより物知も大通もなくみなやぼ也、野父せい人して物知となる、物知化して能人と成る、能人日をへて大通と成る、此大通と申まするが、誠に是迫分也、身の上バて堅爺となり、又は孤をもかぶる、人間の先生死の境と申は、此大通でござります。

大通に對する定義は略此邊であるらしい。

夫レ通に五つの差別あり、先眞の大通といふは其形甚だ柔和にして伊達りつぱを不好、空閑（むだ）洒落等をいはずして胸に納め、五味の味ひもきで喰つて、ちよちよらをいはず（「通人三國師」）

然るに洒落本を見ると、一方では大通の講釋をなし大通を氣取りながら、一方では通をひけらかす事、半可通、似田山の態度なのであつて、其處に矛盾があるのに作者自身意識しなかつた。

元來洒落本を通觀するに、其創作の基調は通にあつた事は誰も知る所である。之は人類の智識慾の滿足と、優越感の滿足とが結合して成れるもので、人事現象の複雜な都會人に多く生ずる、國文學界では前に清少納言、吉田兼好、後に井原西鶴をあげる事が出來る、人情の機微を穿ち、他の心づかぬ物象に銳利た觀察をなし、あらゆる事に智識を有し、其該博さに優越感を滿足させて居るのである、洒落本には此氣分が橫溢し、一人通を說けば何となく自己の優越を傷つけられた如く感じ、之を貶し更に大通を說くのが、彼等の常であつた。その端的な表現が大通命である。

然し要するに洒落本は、人情の機微を描く上に於て、遊里の風俗習慣を寫す事に於て、江戸市井の事情に通ずる點に於て、文墨の士、藝人等の消息通を誇る點に於て、通の氣分の横溢せる作品である、都會文藝の偏した展開である、その態度を最もよく代表せるものが、此大通論に屬する洒落本と云へるであらう。

（へ）擬似文學

擬似文學とは、洒落本全篇を過去の書物に擬似する構想を稱する、内容の構成、文脈等を似せて一種の滑稽化に興味を感ずる作品である、俗に云ふ捩りを作全體に施す文學的遊戯である、かゝる遊戯は既に假名草紙中、「伊勢物語」「徒然草」等に擬似せしめた作品が散見して珍らしくない、夫が洒落本中にも存し、一分類をなすのである。

既に洒落本の書名に、漢書の名稱又は漢文の成語を捩つてあるものの多數ある事は、誰も心づく點である、次には和書の名稱の捩りも散見する。例へば「當世導通記」（道中記）、「金錦三調傳」（古今三鳥傳）「惠世物語」（伊勢物語）、「家暮長命四季物語」（鴨長明四季物語）等である。

偖内容全體をもぢつた洒落本で、漢書を題材にしたものをあぐれば、「蕩子筌枉解」（明和七年）がある、「唐詩選」中の五言絶句に註解を平易な和文で施した體裁になつて居るが、皆遊里の方へ結び付けてある。

田家春望

出門何所見　うらの田圃ばかり見てゐるもきづまりなれば江戸町の門をでて中の町を見やれば櫻どきにてひときはにぎ〳〵しい

春色滿平蕪　はるげしき水戸尻までみち〳〵てゐる

と云つた形式である。京傳作「戯作四書京傳予誌」（寛政二年）も之に類する。孟子を申と洒落れ、「傾日主不遠千里而來、亦將有以見贊書乎」と云つた書き出しである、大學を大樂、中庸を通用、論語を豐後とし、章句に註解を施し

た體裁が全く前書と似て居る。「傾城情史」(天保三年)は更に之を襲用し「大客、酒氣章句、酒酊子曰大客吉之妓書而初客入通之門也」などと洒落れてる。

易學を模擬した書がある、「浪花色八卦」(寶暦八年)「浪花今八卦」(安永二年)「意氣客初心」(天保七年)「擲錢青樓占」(安永三年)「祕事眞告」(刊年未詳)等である、周易が難解であり然かも國民間に勢力があつたので、新井白蛾の「易學小筌」式の平易な實用的な書が多く發表せられた、之等に模擬したのが此種の洒落本である。「祕事眞告」は人相見の書に擬したもので、卷末に艶史人相七品考を附してあるのが如何にも專門書らしく見える。「擲錢青樓占」は錢を投げて裏表に依る民間の卜占を、遊里に結び付けたものである。唯「意氣客初心」は內容が黃表紙に近い。

之等の書はもぢり其事に興味が存し、其內容に至つては傾城買指南に類するもの、遊里案內に屬するもの等があるが、目的が其處にないので此方面では上乘の作とは言へない。其他の洒落本で模擬氣分に滿ちた書は多い、或は徒然草、方丈記、謠曲等の一節を模擬し、殊に謠曲をもぢつたものは、その曲譜まで附してある。

かゝる文學的遊戲は、既に江戸文學の初期時代から横溢せる氣分で珍らしくないが、最著しく現れて居るのは、狂歌であらう。

風吹けば起きつころびつ禰宜達の夜半にや木見にひとり行くらむ(「醒睡笑」)
山人は冬そひもじさまさりけるあへ物草も枯れぬと思へば(石田未得)
田子の浦にうち出て見ればそのゝちの寶永山も雪は降りつゝ(加陪仲塗)
來ぬ汐を松尾の浦か乘り合の八ツ山下で待困りつゝ(「滑稽和合人」)

和歌全部の引歌であつたり、所謂地口歌であつたりするものゝ狂歌に多い事は、誰も知る所である、かゝる歌の流行

した動機は、和歌の本歌覺えから來た事は勿論であるが、古典崇拜の思想と、衒學思想と、自己の記憶が繰り返される快感、一種の謎を解くと云ふ讀者の快感等に基因する、國文學上の一大思想脈なのである、之が一方では狂歌、更に一方では遊戲化して口合、地口、狂句（狂句中の一部）となつた。

その狂歌を作る人々、特に天明を中心とする狂歌師が、同時に洒落本作家なる事を考へれば、洒落本に此種に屬する作品の存するのも怪むに足りない、まして作中の人物は、やゝもすれば地口位を日常口にして居る輩なのだ。

前記（ロ）案内記に屬する地理的の作品も實は同時に、此分類に入れ得る、それは案内の意識が勝つて居るか、もだりの氣分が勝つて居るかに依つて決定す可きであるが、實は兩方に入れ得るものである、分類は劃然となし得るもので無いと云ふのが妥當であらう。

（ト）繪畫的

繪畫的洒落本とは、繪畫が主となり、文章は從となり、換言すれば見る洒落本で讀む洒落本でないかも知れない。文は單に繪の說明役を務めるに過ぎないものである、之は明に洒落本よりは黃表紙に屬す可きものであるが、作者は依然洒落本のつもりで、本の外形まで洒落本仕立にして居るからやむを得ないのだ。洒落本構想の新奇を競ふ心持が、かゝる種類の作品を作るに至つたと見られる。

「嘶之畫有多」（安永九年）は全く黃表紙の氣分の勝つた本である、卽每丁繪畫を以て吉原の年中行事を描き、上に說明がしてあり、本の形も中本である、しかし卷末に長々と郭の消息が書いてあり、其廣告文にも「よし原年中行事、古實めづらしき遊びのしゆこうを記す」とあつて、内容はむしろ洒落本と認定す可きである。卽繪畫的洒落本に分類するのが妥當であらう。

「人達茶懸物」（天明六年）も此種に入る可き洒落本で、芝甘交の挿繪に狂歌師の諸大家が讚を書いて居り、夫が多く遊里に關して居る。

京傳作「傾城鑑」（天明八年）及「新造圖彙」（寛政元年）は全く此分類に入る可き代表的の作品と云はなければならぬ、前者は遊女の氣質諸藝を說明した上、其使用する長柄傘模樣、提灯合印、定紋替紋、白筆、印鑑等を忠實に圖で紹介してあるし、後者は遊里に關する事物を分類して面白笑止しく繪畫で示してある、「三才圖會」風の書だ。

之等京傳の作は、洒落本では一種の創意を示してるが、滑稽本では既に此構想を發表して居るのだつた、即「小紋新法」（天明六年）で滑稽的な小紋の意匠畫を「小紋帳」風に發表して居る。「小紋雅話」（寛政二年）「百化帖準擬本草」（寛政十年）「奇妙圖彙」（享和三年）も洒落本より遲れてるが、同じ構想に屬する。「百化帖準擬本草」はいろいろの物を集めて、花鳥蟲類に擬した戲畫で、例へば「東海棠に馬追蟲」と題し、あわび貝と辨とで秋海棠を描き、春駒の玩具で馬追蟲を描く類である。「奇妙圖彙」は文字で畫を描いたり、團子、鴫燒、田樂を竝べて座頭の行列を造つたり、酸漿で鮹入道を造る類である。

其他「教訓繪兄弟」（寛政六年）の如く、輪郭だけ似て內容は全く殊なる物を竝べた戲畫をも京傳は發表して居る。彼は文才のみならず、畫才も溢るゝ如く有して居り、隨つて此種の圖案にも豐富であつた、夫が更に洒落本に向つて展開したと見られる。

然かも「傾城鑑」の如きは非常た勞力を費して各遊女の筆蹟を蒐集してある、其凝り性も彼でなくつてはと思はしめる。要するに此種に屬する書は、前の「嘶之畫有多」の畫者も政演（京傳）であり、全く京傳一人活躍して居るのである。

但しかゝる滑稽書の創意は、竹杖爲輕（森羅萬象）作「見立假撃盡」に依つたのではないかと推定される、卽同書は卅六の貝の戯畫をならべ、各狂歌師の歌一首を載せた書であり、其序の「卯のはつ春」を天明三年と推定してかく考へるのである。

3　特殊的洒落本

特殊的洒落本とは、洒落本の必須條件とする遊里を背景に有たぬ本で、しかも作者は洒落本に入れる心持で書いた書を稱するのである。卽本の外形が洒落本になつて居るのだ。「女鬼産」（安永八年）「隣壁夜話」（安永九年）「田舍芝居」（天明二年）「田舍談義」（寛政二年）「昇平樂」（寛政十二年）等が之に屬する。

「女鬼産」は當時兩國の見世物に出た鬼娘と、中村野鹽、市川柏莚の死、回向院に於ける善光寺の開帳等を題材としたもので、全く挿繪のない黄表紙と云ふ書であるが、本は小本で外見は洒落本と見做さざるを得ない。

「隣壁夜話」は五つの婦人に關する怪談を掲げ、其中で二つだけが遊里に因めるもので、全體の敍法は讀本の怪異小說か、實錄小說に屬す可きものである。然かもやはり作者は洒落本の部類に入れる心組であつたらしく、本の外形も、序に緣のない玄人と地女の服裝の相違などを書いて居るのだ。

「昇平樂」は單に大坂の俳人生活を描いたもので、二三の俳人が集り唐書の噂から俳人の噂に及び、支考を論じ大江丸を語ると云ふだけの筋で、洒落本には緣遠い。しかし本は小本であり行文中「古契三娼」の文を襲用してあつたりして、作者の心持はやはり洒落本のつもりらしい。

「田舍芝居」は越後國大沼郡の田舍芝居を描寫したもので、若い男女の忍び合ひの外、遊里は添出されない、しか

し此書は京傳の洒落本に反感をもつた作者が、洒落本にあらず野夫本なりと意識して書いたもので、寫實とは實在感を起させればよい、「實を以て實を記すは實錄なり、虛を以て實の如く書成は戲作なり」と論じた抱負を本書で示したのである。（二　洒落本の定義と內容の展開、第二期參照）

かゝる目的が他に存したとは云へ、田園に取材を求めたのは、明に洒落本の展開が、江戶の遊里以外に及ばんとする傾向を示して居ると思はれる、作者森羅萬象は既に「眞女意題」（天明元年）で、東北の田舍侍を寫し、其方言を巧に描いて居る位であるから、方言には多少自信があつたらしく、夫が「田舍芝居」となつたのであらう。

次に「田舍談義」（寬政二年）は、明に「田舍芝居」に刺戟せられて綴られた作品で、田舍寺のお談義聽聞に出かけた村の人々の間の滑稽と戀愛とを描いたものである、作者竹塚東子は、其號の如く千住在竹塚の農民であるから、其生活に相應はしき作品であらう。

滑稽本には此兩書の正系とも見る可き書が多く發表されて居る。其代表的のものは、「狂言田舍操」（文化八年）「旅芝居田舍正本」（文化十一年）などであらう。前者は義太夫語りである馬笑と三馬の合作であり、後者は狂言作者萬壽亭正二の作なる事を思へば、寫實なる事が肯定される、殊に後者は背景を越後蒲原郡に採つてある點など「田舍芝居」を想起せしめる。

此「田舍芝居」「田舍談義」に依つて田園生活が描寫されんとした事は注目す可き現象で、江戶遊里描寫が展開せられて、「變通輕井茶話」に於ける輕井澤の飯盛描寫、「面美多勤身」に於ける東海道宿々の飯盛の品評と飛躍したのと相俟ち、「膝栗毛」の飯盛の滑稽が現れるのも當然の進捗と考へられる。

滑稽本の流れを通觀するに、多くは上方の八文字屋風の文脈か、風來山人一派の狂文であつて、寫實的對話を主と

する滑稽本は、實に享和二年發表された「膝栗毛」を以て嚆矢とするらしい。「膝栗毛」の歡迎せられた理由は他にも種々あるが、此寫生的な實在感の豐かな點が可なり重要な理由をなして居ると私は考へる、奈何にも讀者と共に生活して居り相た彌次郎兵衞喜多八の滑稽が最喜ばれたのであらう。

然かも此滑稽本に珍らしい描寫手法は、洒落本に於ては珍らしくも何ともないものだつた、洒落本の價値はかゝる點でも考へなければならず、同時に此特殊的洒落本存在の意義も考へて見なければならない。

四　洒落本の文學的地位

洒落本が文學的に占む可き第一の地歩は、其表現法に依つてであらう。現代語（其當時の）を音のまゝに寫生し、訛も方言も其まゝに表はした對話に依つて、人物を活躍せしめ、夫を補ふに地の敍述文を以てした表現法は、全く現代の創作の典型をつくり上げたものであつて、洒落本から流れ出た同じ形式をもつ滑稽本、人情本と共に、現代小說の形態を確立せしめた功は洒落本に在ると云つても誤謬でなからう。

「云ひけるは……」「云ひけるやう」「と云ひければ」の如き敍述文がなければ、對話を挿入し得なかつた時代の創作の奈何に窮屈であつた事か。浮世草子に至つて稍此舊殼から脫せんとして、然かも全く脫け切れず、俳諧の半口語體の文脈を捨て得たかつたのである、却つて役者評判記の類が對話のみを自由に驅使して居た、戲曲、臺帳は勿論實演す可き必要上對話のみを用ゐてあるが、之が創作界には容易に採り入れる事が出來ず、洒落本と云ふ新文學の勃興に依り新形式が用ゐられ、始めて日常會話の描寫が行はるゝに至つたのだ。思へば國文學に於ける物語の形式の展開

の遲かつた事よ。室町文學以前に於ては、笑ひ聲、絶叫語の完全な寫生すら絶無だつた事を考へれば、寫實描寫の奈何にその手法に於て、緩慢な歩みをとりつゝあつたかゞ推測されよう。

夫が洒落本に至つて完成したのである。洒落本が國文學上重要なる地位を占めるのは、第一に此點でなければならない。勿論其地の文が依然文語體で、之が口語體になるには、明治時代まで俟たねばならなかつたのではあるが。

次に注目す可きは、洒落本が江戸に於ける（上方に對する）遊里文學の代表的作品である事である。然かも其態度が、遊里を歡樂境、享樂地と見做し、公娼私娼を問はず遊女の存在を肯定し、彼女等の社會的地位に對し、何等の同情反省をも見せて居ない點である、勿論作中の遊女は苦界に對して悲哀を訴へて居る、特に後期の洒落本になる程其傾向は甚しくなるやうに見えるけれど、多くはまゝならぬ戀の苦しさを說明する場合にのみ用ゐられ、作者の心持はその點には切實ではない、やはり歡樂境に於ける對象としての遊女だけが、彼等の眼に映じてるやうだ。かゝる見方に依る遊里文學は恐らく將來は出まい。

明治時代に於ても遊女文學としての作品がある、尾崎紅葉の「伽羅枕」、廣津柳浪の「今戸心中」、江見水蔭の「泥水清水」、私娼を取扱つて居るのでは樋口一葉の「濁り江」等である、此中で江戸文學の名殘を示して居るのは「伽羅枕」だけで、他は皆遊女の社會的地位に關心をもつた作である。遊女の存在を肯定し、遊戲的戀愛の對象として取扱つた江戸の洒落本、夫は古典的にも存在價値が認められよう。

次に洒落本は當時の智識的有閑階級の思想と趣味、否實生活の一部分を代表せるものとして多大の價値を有する。洒落本の作家の素性の明確なるものをあぐれば、大半は御家人、各藩の上府者、或は武士上りの町人、武士に準ずる醫者等である、風來山人、蜀山、歸橋、菅江、南陀伽紫蘭、春町、喜三二、雲樂齋、蕪十、萬象、一九、谷峨等、末

期の鼻山人すら然りである、町人は京傳、三馬、内新好、振鷺亭、厚丸等に過ぎない。其他の作者に至つても身分あるからの匿名と推測される。

かゝる作者等に依つて綴られた洒落本が、奈何なる階級を最よく代表して居るか、容易く知り得ると思ふ。洒落本に現るゝ洒落も、當時の流行語は別として、奇抜な比喩や警句も、一部分は作者の創作であらうが、滑稽本中の人物や、人情本中の人物の口にする言語より遙に高級である、頭腦が働いてる。高級だからよいと云ふのではない、洒落本が滑稽本、人情本より特殊な階級をより多く代表して居ると言ひたいだけである。勿論洒落本には町人も多く描かれて居るが、江戸の武士階級が多量に描かれて居ると言ひ度い。

讀本は武士の家庭では讀む事を許されたと古老に聞いた事がある、夫も主として馬琴の作品らしい。馬琴の讀本が一般武士の家庭に健全な讀み物と見られた事は、誰にも想像し得る、しかし一面に於て江戸の武士には洒落本を作る、隨つて武士階級の愛讀者もあつた事を認めねばならぬ、それは遊里其ものの興味もあらうが、洒落本が江戸武士の一部の實生活を、横斷面的に描いてある點に惹きつける魅力の存在が考へられる。

兎に角、町人文學全盛の江戸時代に於て、洒落本は特殊階級の都會人の趣味なり實生活なりを代表せるものとして、異なつた地位を要求して居る事は注目しなければならぬと思ふのである。

（昭和七、九、廿、病床にて脱稿）

昭和七年十月十日印刷
昭和七年十月十五日發行

岩波講座 日本文學
第十七回配本

版權所有

編輯兼發行印刷者 東京市神田區一ツ橋通 岩波茂雄

印刷所 東京市神田區錦町 精興社

大森製本

發行所 東京神田 岩波書店

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 7026

PL
726
.35
Y34